

第4章 越谷の 観光案内



16 県営しらこぼと水上公園



11 日本庭園 花田苑



6 蒲生の一里塚



17 キャンベルタウン野鳥の森



12 保存民家大間野町旧中村家住宅



7 しらこぼと橋



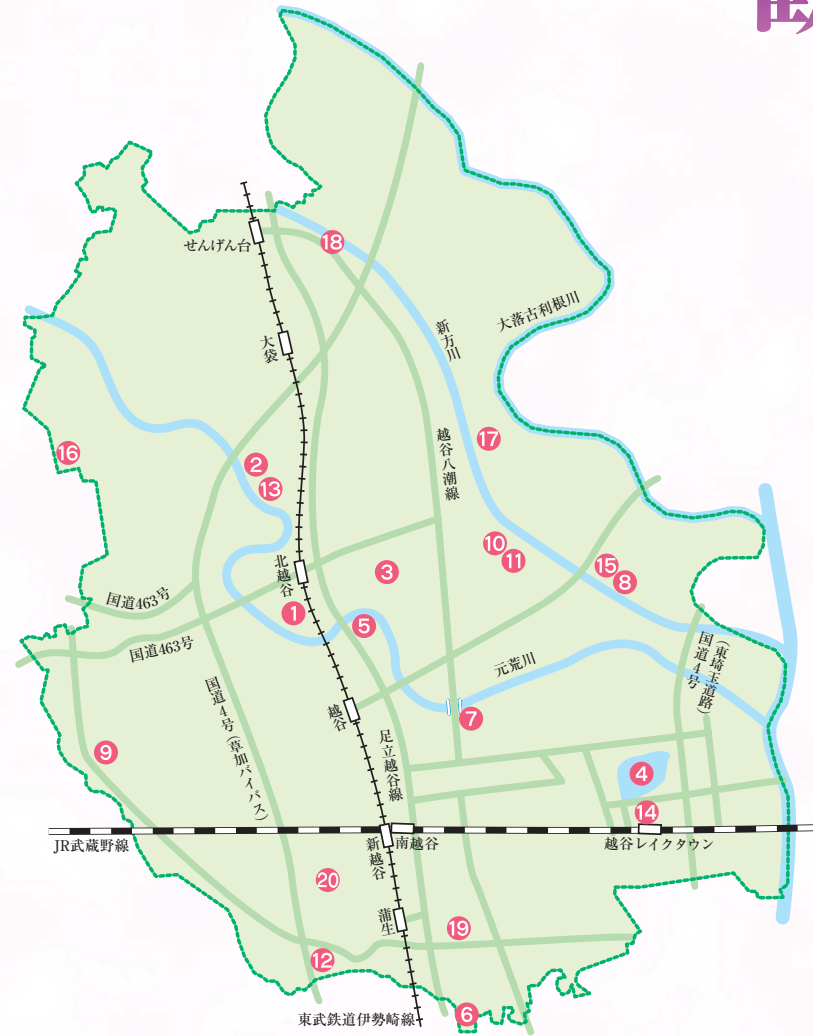
18 児童館コスモス



13 宮内庁埼玉鴨場



8 東埼玉資源環境組合展望台



1 元荒川の桜堤



19 児童館ヒマワリ



14 見田方遺跡公園



9 県民健康福祉村



2 越谷梅林公園



20 科学技術体験センター「ミラクル」



15 市民球場



10 日本文化伝承の館 こしがや能楽堂



5 建長元年板碑



4 大相模調節池



3 久伊豆神社



越谷花火大会

場所●市役所わき 葛西用水

夏の風物詩としてすっかり定着した花火大会、息つく暇なく打ち上げられる5,000発の花火は迫力満点で越谷の夜空を彩ります。会場周辺には、多くの見物客が訪れ、色鮮やかな花火に酔いしれます。



下間久里の獅子舞

場所●香取神社（下間久里）

下間久里の獅子舞は、文禄3年（1594）に京都から伝わったとされ、昭和54年に県の無形民俗文化財に指定されました。毎年7月15日に行われ、獅子舞が奉納された後、家内安全、五穀豊稔を祈願し、夜遅くまで町内の家々を回ります。



葛西用水のハナショウブ

場所●市役所わき 葛西用水

平和橋を中心に葛西用水中土手には、濃紫や薄紫、白、ほかしなど色や形がさまざまなハナショウブが咲いています。中央市民会館前の噴水などの水辺空間と一体となり“水郷こしがや”の景観に彩りを添えます。



梅林公園の梅

場所●越谷梅林公園（大林）

約20,000平方メートルの敷地には、白加賀、梅郷、紅梅、晚白加賀（おくしろかが）などの梅が、約250本植えられ、このほかに梅の見本園として34種類67本の梅の木が可憐な花をつけます。豊かな梅の香りに誘われて、多くの人でにぎわいます。



元荒川の桜堤

場所●北越谷第五公園から東武鉄道の鉄橋までの遊歩道

梅のシーズンが終わりを告げると、いよいよ桜の開花宣言です。北越谷の元荒川堤の桜並木は、北越谷第五公園から東武鉄道の鉄橋までの2キロメートルにわたって約350本のソメイヨシノが開花し、桜並木には提灯が飾り付けられ明かりがともされます。

夏

県営しらこぼと水上公園

所在地●小曾川729-1

県営しらこぼと水上公園には、流水プール、スライダープール、もぐりプール、幼児プールなど、子どもから大人まで楽しめるプールがたくさんあり、多くの家族連れなどでにぎわいます。



出羽チューリップコミュニティフェスタ

場所●出羽公園（七左町）

出羽地区内の小・中学校や自治会などで育てたチューリップを公園内に飾るほか、水耕栽培で育てたチューリップも公園の池に浮かべます。

春



北川崎の虫追い

場所●川崎神社（北川崎）

虫追いは、川崎神社で毎年7月24日に行われる、江戸時代から続いている農村行事です。平成20年に県の無形民俗文化財に指定されました。たいまつに火を灯し、あぜ道を行進しながら害虫を追い払い、豊作を祈願するものです。



葛西用水のアジサイ

場所●市役所わき 葛西用水

葛西親水緑道の中央市民会館からしらこぼと橋の区間に、ニホンアジサイや西洋アジサイなど約900株余りが植えられています。6月下旬まで色とりどりのアジサイが通る人の目を和ませています。



南越谷阿波踊り

場所●南越谷駅・新越谷駅周辺

毎年8月下旬に、「南越谷阿波踊り」が開催され、南越谷駅・新越谷駅周辺は阿波踊り一色となります。踊り手たちは日ごろの練習成果を観衆に披露、力強い男踊りやでやかな女踊りで魅了します。



葛西用水のチューリップ

場所●市役所わき 葛西用水

葛西用水のチューリップが春の風物詩として、中土手沿い約500メートルにわたり、赤や黄色など色も鮮やかに咲き誇ります。また、越谷のチューリップの切り花は県内生産量第2位の花き園芸となっています。



久伊豆神社のフジ

場所●久伊豆神社（越ヶ谷）

久伊豆神社の境内にあるフジは、樹齢200余年で、株回りが7.3メートルあり地際から7本に分かれていて、埼玉県天然記念物に指定されています。毎年4月下旬には、藤まつりが行われ、たくさんの人が訪れています。



こしがや産業フェスタ

場所●総合体育館周辺（増林）

越谷市の産業の発展のため、商工業者と農業者が一堂に会したイベントで、越谷産農産物や市内に伝わる伝統的手工芸品の展示・即売のほか近隣市町に事業所を置く製造業や建設業者による製品の展示や情報交換などが行われます。



元旦マラソン

場所●市役所周辺

年が明けると、新年のスタートを告げる最大のイベント「元旦マラソン大会」が市役所周辺で開催されます。毎年多くの人に参加し、心地よい汗を流します。



越ヶ谷秋まつり

場所●越ヶ谷、中町、越ヶ谷本町の旧日光街道周辺

江戸時代中期から伝わる豊年を祝うまつりでおおむね3年に1度行われます。古い伝統と格式があり、江戸時代の名残をそのまま伝える歴史絵巻を見るようです。まつりは久伊豆神社（越ヶ谷）から神様がお出ましになる神輿渡御で始まり、到着した神輿は、各町内の山車8台に迎えられ町内を巡行します。



花田苑の紅葉

場所●日本庭園 花田苑（花田）

花田苑は、面積2.1ヘクタール。中央には約4,000平方メートルの大きな池があり、周囲にせせらぎがある日本庭園です。正門には、市内宇田家の長屋門が復元されているほか、庭園内には茶室もあります。

冬

越谷市成人式

場所●市内11会場

正月が終わると、市内各地区ごとに成人式が行われます。各会場では、さまざまな催しが行われ、新成人たちは同級生や恩師たちと楽しいひとときを過ごします。



越谷市民まつり

場所●市役所周辺

毎年秋に開かれる越谷市民まつりは「安全・調和・明るい街づくり」を基調に、華やかなオープニング・パレードから始まり、盛りだくさんのアトラクション、模擬店などが数多く出店され、ふるさと恒例のイベントとしてすっかり定着し、20万人に及ぶ人出でにぎわいます。

秋



旧中村家住宅の雪景色

場所●保存民家大間野町旧中村家住宅

大間野町旧中村家住宅は江戸時代に旧大間野村（現在の太田野町周辺）の名主を勤めた中村氏の旧宅で、平成9年に越谷市が寄贈を受け、建築当初の姿に復元したものです。敷地内には主屋、長屋門、石蔵、土蔵があり、各建物には昔の生活用具や中村家に関する貴重な古文書などを展示しています。



オビシヤ

場所●川崎神社（北川崎）

その年の豊作を祈る農村行事で、古くは「歩射（ぶしや）」と言われていました。鶴亀と松竹梅が描かれた的を目標けて、弓で矢を射り、その年の豊凶を占うもので川崎神社で行われます。うまく的に命中するたびに大きな歓声があがります。



コスモスフェスタ

場所●新方地区センター・公民館周辺（大吉）

市内大吉の休耕田および新方地区センター・公民館周辺で開催されるコスモスフェスタは、秋風に揺れるピンクや白などのコスモスの摘み取りが行われ、たくさんの人が訪れています。



菊花大会

場所●第1体育館（大沢）

市の花でもある菊。昭和初期から始まった市内の菊の栽培は有名で、それだけに毎年開かれる菊花大会には、華麗で格調高い作品が一同に集まります。愛好家が愛情を込めて育て上げた300鉢以上の菊が優雅な香りを漂わせています。



大聖寺の山門

所在地●大聖寺
相模町6-442

大相模不動尊は天平勝宝2年(750)の創建と伝えられ、本尊は不動明王である。中世には岩槻太田氏の祈願寺として、また、江戸時代には関東三大不動の一つに数えられ、七堂伽藍を備える大寺として興隆をみた。現在の仁王門(山門)は文化元年(1804)のものである。



廿一仏 板石塔婆

所在地●慈光庵境内
増森1775

板石塔婆のうち種子(梵字)二十一仏を刻んだ板碑は、申待供養という民間信仰と習合した神仏混同の所産物で、全国で39基が確認され、市内では9基が確認されている。増森にある慈光庵(薬師堂)の廿一仏板碑は天正3年(1575)8月銘の申待供養塔、縦153cm、横46cmの完形である。



蒲生の一里塚

所在地●藤助河岸そば
蒲生愛宕町876

江戸時代の各道中に、旅人の行程の目安として一里(約4km)毎に塚が築かれ、エノキが植えられていた。この塚は日光街道の蒲生の南端旧出羽堀の東にあり高さ2m、東西5.7m、南北7.8mの長方形で塚の東および南辺には石垣が施されている。現在では、県内の日光街道に残る唯一の一里塚である。



野島浄山寺の大鰐口

所在地●浄山寺
野島32

鰐口とは、社殿・仏堂前の軒下につるす金属製の祈祷用の鳴物具。天保12年(1841)に奉納された銅製で、直径6尺(176cm)厚さ2尺(60cm)、重量200貫(750kg)という全国でもまれな大きさである。当時浄山寺では、多くの人々の信仰を集めていたことが奉納者銘から知ることができる。



香取神社の彫刻

所在地●香取神社
大沢3-13-38

大沢香取神社の奥殿の板壁に、さまざまな彫刻が施されている。彫刻師は浅草山谷町の長谷川竹次郎で板壁の北面には紺屋の労働作業の図柄が彫刻されている。江戸時代、越ヶ谷・大沢は紺屋の盛んな所で、当時を知る貴重な民俗資料である。



烏文斎栄之筆「瓦曾根溜井図」

所蔵●市立図書館
東越谷4-9-1

旗本細田家の嫡子で宝暦6年(1756)の生まれ。鳥居清長や喜多川歌麿に師事し、細田流として一派を興した。栄之は美人画を得意とし、文化人との交流を深めていた。瓦曾根村の世襲名主中村家を訪れたとき描いたのが「瓦曾根溜井図」であったとみられる。

史跡



見田方遺跡

所在地●越谷レイクタウン駅北側
大成町3・5・6丁目、東町4丁目

昭和42年(1967)、見田方耕地(現在の大成町)で発掘調査が行われ、竪穴式住居跡が確認され、数多くの土器や祭器が出土した。出土品などから、この遺跡が古墳時代後期(6~7世紀)の遺構であることがわかり、かつて古代人が竪穴住居に住み、生活していたことが推察される。



林泉寺 駒止のマキ

所在地●林泉寺
増林3818

山門から本堂に至る参道の右側にあり、徳川家康が当地へ鷹狩りに来たとき、このマキに馬をつないだといわれている。推定樹齢は400年後後といわれ、その枝ぶりはまれに見る美しい樹形をなしている。



建長元年板碑

所在地●元荒川橋そば
御殿町3-36

この板碑は建長元年(1249)銘のもので、市内では最古で最大のものであり、弥陀一尊の一仏板碑、高さ155cm、幅56cmでその彫刻は深く雄大で鎌倉期の初発期板碑の特徴がでている。



越ヶ谷順正会 関連資料(順正会旗)

所蔵●市立図書館
東越谷4-9-1

越ヶ谷順正会は、昭和10年(1935)に疾病者救済を目的とした保険制度の組織として「順正会」の名で発足し翌年には「越ヶ谷順正会」となる。法施行前より「相扶共済」の精神で独自の組織を成立させていたことで国民健康保険制度発祥の地と称されている。



呑龍上人 供養墓石

所在地●林西寺
平方249

呑龍上人は、弘治2年(1556)一ノ割村生まれ。14歳のとき平方林西寺に入寺し僧となり、のちに増上寺で修業に励んだ。生来情深く、貧家の幼児を多数養育したことから「子育て呑龍」と称された。

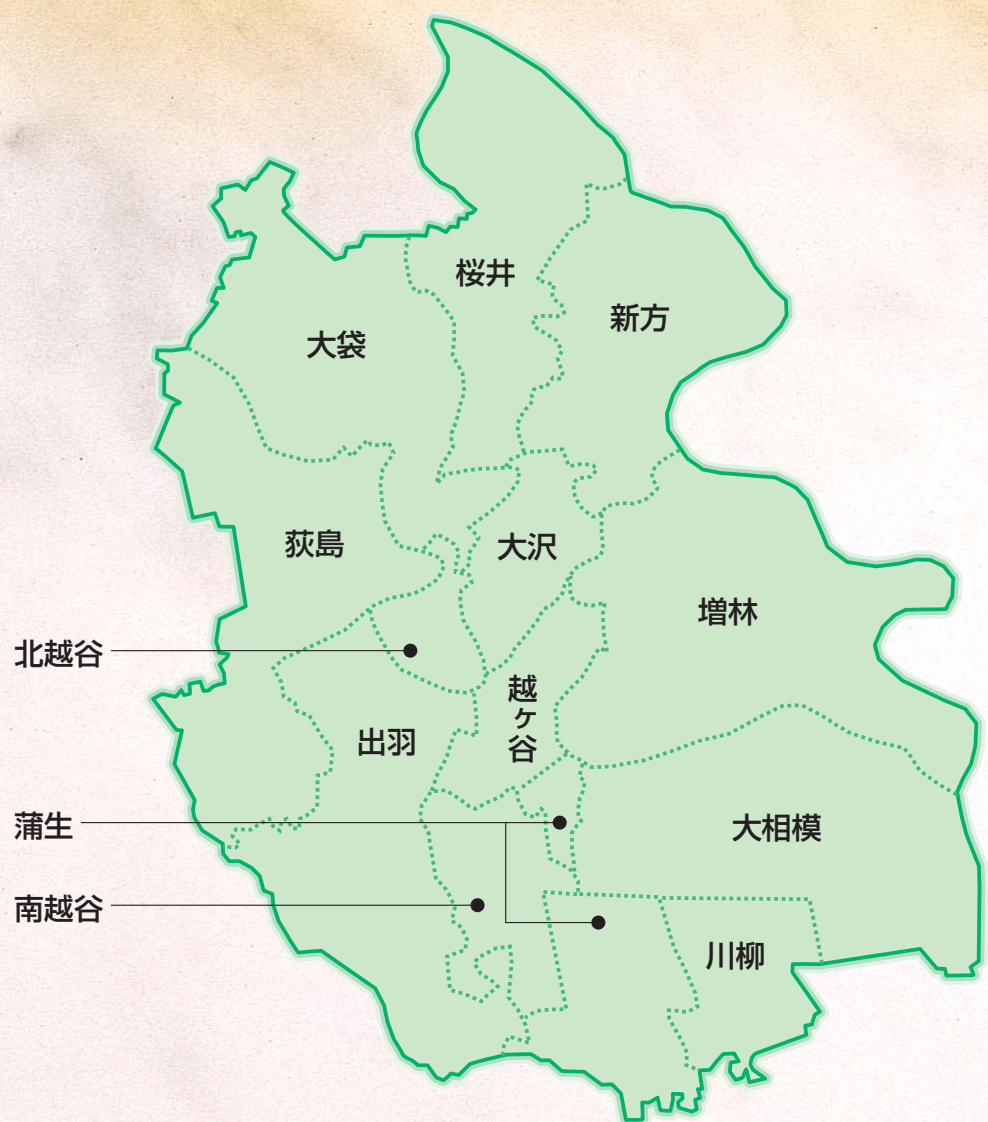


平田篤胤 奉納大絵馬

所蔵●久伊豆神社
越ヶ谷1700

平田篤胤は、江戸時代後期の国学者でしばしば越ヶ谷宿を訪れていた。この間篤胤は久伊豆神社に「天之岩戸開」の大絵馬を奉納。これには文政3年(1820)7月9日、画工山里貞由、平田篤胤(花押)の銘がのせられている。

越谷の地名



わたしたちが住んでいる土地の名前には、いろいろな意味や由来があります。人々がこの地に住み着いたとき、その場所の自然の様子やその自然環境によって名前を付けられたところが数多くあります。

また、古い時代、条里制といって田畑や住まいの区画整理が行われましたが、この条里にちなんで名付けられたといわれる所もあります。越谷には、四町野（現在の宮本町）・二町野（増林）・四町野（現在の東町）・大里などの地名がありますが、これらは、はたして条里にちなんだ地名かどうか確かでないものの、条里の遺名（なごり）ではないかともいわれています。

このほか増林のなかに「定使野（じょうつかいの）」という所がありますが、これは土豪などの使用人である定使が住んでいた所、神明下（さといけ）にある「在家」という地名はそこに人家があった所、また、西新井に「堀の内」という所がありますが、これは堀を巡らせた土豪の屋敷内であった所、大相模の「西方」「東方」は大相模郷のうち西の方、東の方という意味でしょう。また、新田を開発した人の名前をとって名付けられた所もあります。七左衛門村や弥十郎村などがそれです。

越ヶ谷地区

〈越ヶ谷郷〉

江戸時代以前は、現在の出羽地区や萩島地区（袋山を含む）、それに越ヶ谷・瓦曾根・花田・さいたま市岩槻区釣上などの広い地域を「越ヶ谷郷」と呼んでいました。この越ヶ谷の地名に関しては、関東の武士団である千葉氏の系図のなかに、今からおよそ九〇〇年ぐらい前の人とみられる「古志賀谷」という人物の名が載せられています。当時の人は、そこに住んでいた土地の名を苗字としていたので、越ヶ谷は古くからの地名であったことがわかります。

その後、徳川家康が関東に入国し、やがて天下をとると、中山道や東海道など、江戸を中心とした街道を整備し、人馬の中継ぎ所である宿場を取り立てました。

このとき、瓦曾根から四町野にまでました。家康は、この越ヶ谷御殿を大層好み、一年に三度も越ヶ谷を訪れたこともありました。

また、耕地にもそれぞれ名前が付けられています。越ヶ谷のなかには、一番・二番・三番という番号が付けられた耕地があります。これは検地（江戸時代の土地の丈量調べ）のとき、はじめに検査した順から一番、二番と付けられたといえます。

このほか堀の名では、赤山街道（県道越谷鳩ヶ谷線）を鳩ヶ谷に向かつてゆく途中に出羽堀という堀があります。この堀はその昔、会田出羽が、出羽地区の湿地を干拓するために掘り割ったので、出羽の名をとって付けられたといわれています。

*このほか越ヶ谷地区には、弥生町や柳町、宮前などの地名がありますが、これらは新しい町名です

かけての道中筋（日光街道）に新たな家並がつくられ、宿場が設けられました。四町野や瓦曾根などから、新たに独立した町がここにつくられたわけです。そしてここが越ヶ谷郷の中心であるとして、この地の名を郷名である越ヶ谷の名をとって、特に越ヶ谷町と名付けました。

ところで「コシガヤ」の地名はいろいろ言われていますが、「コシ」とは腰とも書かれ、山や丘などのふもとを指し、「ヤ」とは湿地などの低い土地をさすそうです。すると越ヶ谷の「コシ」の上にあたる場所は、赤山の百観音や野田のさぎ山のある武蔵野台地（赤土の高い土地）にあたります。そして「ヤ」とはその台地のふもと「コシ」にあたる低い土地ということになります。こうして台地のふもとにあたる低い地域が「コシガヤ」と呼ばれたと考えられます。

大沢地区

〈大沢町〉

大沢は、元荒川（荒川）の東方にあたり、古くは下総国下河辺庄新方庄（郷）の中に含まれていました。その後、新方庄は武蔵国に編入されたので新武蔵とも呼ばれました。一説には長祿年間（二四五七〜六〇）、太田道灌が岩槻を支配したころ武蔵国に編入したともいわれています。江戸時代は、武蔵国埼玉郡新方領の中にありました。そして慶長七年（一六〇二）、宿駅制度が整備されたとき、街道筋を中心として、ここに宿場町がつくられました。はじめは越ヶ谷宿の助け合い宿でしたが、後には大沢町の行政組織のうち、交通業務は越ヶ谷町と合体したので、大沢町を含めて越ヶ谷宿と呼ばれました。それで普段は、越ヶ谷宿のうち大沢町、越ヶ谷宿



大正時代の越ヶ谷町

〈越ヶ谷町〉

越ヶ谷町は、江戸時代から独立した町でしたが、明治二十二年（一八八九）に大沢町と組合町をつくりました。その後、さまざまな理由から明治三十五年（一九〇二）に分離し、再び越ヶ谷町と大沢町に分かれました。そして昭和二十九年（一九五四）、越ヶ谷町・大沢町をはじめ二町八カ村が合併し、越ヶ谷の「ヶ」をとって

のうち越ヶ谷町と使い分けられました。

その後、明治時代になり、宿駅制度がなくなり、両町は完全に分離しましたが、明治二十二年（一八八九）の町村合併のとき、大沢町は越ヶ谷町と組合町をつくりました。しかし、明治三十五年（一九〇二）に再び分離し、昭和二十九年（一九五四）、越ヶ谷町はじめ八カ村と合併し越ヶ谷町を構成しました。



昭和30年代の大沢町

越ヶ谷町と名付けました。現在もこの越ヶ谷町は、越ヶ谷地区と呼ばれています。

さて、越ヶ谷町は奥州街道（日光街道）の宿場として新たに誕生した町です。はじめ町内は本町と新町とに分けられましたが、この間に越ヶ谷郷のもの土豪（在地の武士）会田出羽が所有した土地があったので、そこを特に中町と名付け、三町に区分されたといわれます。このほか越ヶ谷には袋町・観音横町・御殿・新道などと名付けられた所がありました。

今でも御殿という地名が残されていますが、それは徳川家康が、今からおよそ四〇〇年前の慶長九年（一六〇四）に、將軍家の別荘である越ヶ谷御殿を建てた所だからです。もともと、この地域は、越ヶ谷郷の土豪会田出羽家の屋敷地の一部であった所です。

なお、関東に入国した家康は、鷹狩りのとき、しばしば会田出羽の屋敷に立ち寄っていました。この屋敷地を大変気に入り、元荒川べりの地を譲り受けて御殿を建

〈大沢の地名〉

大沢という地名は、もともとこの辺りが一面の沼沢地（湿った土地）で、大小七カ所の池や沼があったので、大きな沢、つまり大沢と呼ばれたといえます。町の中は上宿・中宿・下宿と区別されましたが、この上・中・下は江戸を中心としたものでなく、日光からみて上中下としたといわれます。

また、大沢には鷺後・高畑・鷺越などという所があります。このうち鷺後は、鷺後用水路（逆川）に沿った林の茂る古い集落で、鷺が群れをなして集まったことから、はじめ鷺代と呼ばれましたが、のち鷺後と書かれるようになったといえます。

現在の大沢の鎮守である香取神社は、大沢の元村である鷺後に祭られていた香取神社を移したものとされています。

また、耕地名には新田耕地・外河原耕地・皿沼耕地など数多くの

耕地名がありました。このうち飯御免耕地という所があります。それは、ここでとれた米を大沢の香取神社にお供えたので、はじめ「飯御免耕地」と呼びましたが、御供をはずして飯御免と呼んだといひます。

その昔、大沢には十二の池があったそうです。このうち五つの池が元禄年間(一六八八〜一七〇四)に埋め立てられて新田となり、それからは大沢の七つ池と呼ばれました。この池は内池・外池・浅間池・八郎兵衛池・嘉右衛門池・観音坊池・しじめ池の七つです。このうち、内池は大沢町の名主(現在の市町村長)江沢家の屋敷内にあり、外池はその外側にあったことから、名付けられたものといわれています。これらの池は、現在ではすべて埋め立てられてありません。



日光街道沿いに建っていたころの大沢小学校と内池

桜井地区

〈新方庄〉

桜井地区は、明治二十二年(一八八九)に平方・大泊・上間久里・下間久里・大里の五カ村が合併してできた旧村で、現在では桜井地区と呼ばれています。合併のとき桜井村と名付けられたのは、

に沿って設けられた港という意味があるといわれますので、ここはもとの利根川にそった、港の一つであったとも考えられます。



安国寺の円空仏

帝神社などがあります。この平方の南端、会野川の川跡を境に、その隣は大泊の地となります。大泊の地名は、浄土宗安国寺の寺伝によると、紀伊国(現在の三重県)熊野大泊村の安国寺の住職であった、誠誓専故という僧が、今からおよそ六五〇年前の康安元年(一三六一)に、この地を通りかかり、安国寺を再建して住職になり、そして、この僧の故郷である大泊の地名を、この地の地名にしたと伝えられています。

なお、安国寺は足利尊氏が、貞和元年(一三四五)のころ、全国六十六カ国に国家の祈願寺である安国寺を指定しましたが、大泊の安国寺がその一つであったとも伝えられています。このほか安国寺は、蓮生坊と称した、熊谷直実の草庵であったともいわれますが、詳しいことは不明です。

また、大泊の地名については、一説によると、当地域はもとの利根川の一流路であった会野川に面している所であり、泊とは、川や海

〈間久里と大里〉

間久里は、江戸時代から上と下の二村に分けられました。もとは一つの村であったといひます。間久里の地名は人家のある里まで遠い所とか条里制の遺名ともみられています。また、間久里を蒔里と書いて、一説には農作業などを共同で行う所、つまり

昔この地域は下河辺庄桜井郷と呼ばれていたころがあったからだとされています。また、桜井地区は増林地区や新方地区、大袋地区、それに春日部市武里地区や豊春地区、さいたま市岩槻区川通り地区などを含めて、その昔新方庄(郷とも)と呼ばれていました。これらの地は、粕壁から西方に曲流した古隅田川(古いころの利根川主流)を境に、その下方は元荒川と古利根川に挟まれた広い地域です。ここはもともと下総国に属していましたが、今から五二〇年ほど前、太田道灌が岩槻を支配していたころ武蔵国に編入されたので新しい方、つまり新方という地名が付けられたという説があります。しかし、新方の地名は、今からおよそ六七〇年以前から金沢称名寺の記録などに出てきますので、おそらく新しい干潟、新しい陸地、つまり新潟ということから名付けられたとみられます。

「ユイ」から起こった地名ともいわれています。このほか間久里はまこもの生い茂った里(村)、つまり「まこ里」といわれたのが「まくり」になったとも考えられています。

ここはもと、大袋地区の大竹辺りから曲流した元荒川が間久里・大里を通って大林に流れていました。そして、この川に沿って日光街道がつくられたので、旧道を中心に集落をつくっていた上間久里の人々のなかには、日光街道沿いに住居を移し、旅人を相手としたお茶屋を開きました。はじめ八軒のお茶屋が店を開いていたので、八軒茶屋と呼びました。この八軒のお茶屋のうち三軒が、元荒川からとれたうなぎの料理を食べさせましたが、このうなぎは、たいへんおいしく「間久里のうなぎ」と呼ばれ評判になっていきました。

なお、上間久里は、越ヶ谷宿と粕壁宿の中ほどの地にあたり、旅人が一休みするのに都合がよいように茶店が設けられました。このような所を「立場」といひます。

平方と大泊

平方は、市内で最も東北端に位置しています。その形はちょうど地図の上では三角形の形になっています。すなわち東の方が古利根川、西の方は平方の林西寺辺りを頂点として、会野川と呼ばれた古いころの河道が山の形に南へ下がって古利根川へ、三角の形で続いています。この会野川という名は、二つの流れが合わさっていることから名付けられたともいひます。

そして、この川によって区切られた三角形の地は、川によって運ばれてきた土砂によって陸化が進んだ所で、もとは一面の平らな畑地でした。平方という地名は、比較的高い平らな土地ということから名付けられたようです。この平方には子育て呑龍として有名な高僧、呑龍上人が住職を勤めていた浄土宗の林西寺、平方の鎮守である浅間神社、古い歴史をもった女

なお、下間久里の香取神社では埼玉県指定の無形民俗文化財である獅子舞が行われていますが、これは古くからのしきたり通行にわれているものとして有名です。また、大里の名は、大きな里(村)といわれ、間久里と同じく条里制の遺名ともみられています。が、詳しいことは不明です。

新方地区

〈新方村と船渡 大松・大杉〉

この旧村は新方地区といえます。

この新方地区のうち船渡は、古利根川に沿った地で、古くから船の渡し場があったことから名付けられた地名とみられています。このほか上川原・下川原など川にちなんだ耕地名もみられます。

また、大松の地名は、松の木が茂っていたことから名付けられたとみられています。ここには古いころ、六カ村を領有していたといわれる、六カ村栄広山清浄院という浄土宗の古い寺院があります。ここは古利根川に沿った自然堤防の発達した所で、境内には開山塚をはじめ、新方庄を支配していたといわれる新方氏の言い伝えなどが残されていて、伝説の多い寺院です。

大杉は、杉の木が茂っていたことから名付けられたようですが、詳しいことは不明です。

たい字といわれますのでこれを林の上に付けたものでしょう。「増」を「マス」と呼ぶこともありましたが、江戸時代の道しるべには「ましばやし」とありますので「マシ」が正しいようです。

さて、大字（江戸時代からの村）にあたる増林は、古利根川と元荒川に渡る広い地域で、西川・荒川・土手岸など数多くの小字があります。このうち西川や荒川は元荒川沿いの地の小字です。このほか定使野や城ノ上の小字があります。定使野は、古い時代、土豪などに仕える使用人が住んでいた所、あるいは、それら使用人の食料をとる耕地を指したようです。また、城ノ上は、昔、徳川家康の御殿がもとは増林の地に設けられていたことから名付けられたものでしょう。一説によるとこの御殿が在った所は、林泉寺という寺院の辺りといわれています。当時地元の人々はこの御殿を「お城」と呼び、この辺り一帯を城のある所、つまり城ノ上と呼んだとも考えられます。現在、千間堀（新方川）



清浄院の開山塚

〈弥十郎・向畑 北川崎・大吉〉

弥十郎は、江戸時代のはじめ大房村の住民であった弥十郎が新田として開発した地なので、弥十郎と名付けられました。はじめは、沼谷新田とも呼ばれたようですが、もともと沼沢地であっただけに、表沼・裏沼など沼にちなんだ名が多くみられます。

向畑は、もともと大吉・川崎・

のほとりに、城ノ上の名が残されています。

また、増林と花田の境にあたる、千間堀に架けられた橋を鷹匠橋と呼んでいます。江戸時代、越谷地域はお鷹場でした。この鷹場を取り締まる役人のうち、野廻りという役人がいました。この一人に増林村の榎本氏が任じられていました。そして、鷹匠が越ヶ谷宿から榎本家へ用事で行くとき、その道筋にあたる千間堀に橋がかけられました。それでこの橋を鷹匠橋と呼んだようです。

また、花田は、もともと越ヶ谷と地続きで武蔵国埼玉郡に属しましたが、今からおよそ三七〇年前の寛永年間（一六二四〜四三）、天嶽寺前に新川が掘られたため、越ヶ谷の天嶽寺や久伊豆神社とともに、元荒川の対岸になったのです。花田という地名は、荒川（元荒川）が天狗の鼻のように曲流して小林に流れていたこともあり天狗の鼻の形をした耕地、すなわち鼻田と付けられたといわれています。それがいつしか花田と書かれ

大杉・大松・船渡の五カ村が、それぞれこの地を所有していたことから向かいの畑、つまり向畑と呼ばれたといえます。これが向畑村として独立したのは元禄年間（一六八八〜一七〇三）といいますが、大松の清浄院に伝わる寛永四年（一六二七）の寺領検地帳には、向畑村と記されていますので古くからの村であったのは確かです。ここには向畑の陣屋といって、もともと新方庄の支配者であった新方氏の館があった所と伝えられています。今は陣屋の跡であった山は崩されて畑地になっていきますので、陣屋の面影はみられません。

北川崎は、もともと川崎村といいましたが、明治十二年（一八七九）、郡制がしかれたとき、同じ郡内に同じ村名の村があるのは紛らわしいとの理由から、その村名の頭に北や南が付けられたので、とと川崎は、川や海に突き出たところをいうようですが、越谷の川崎は古利根川の屈曲したところから名付けられたようです。

るようになったといえます。また一説には、越ヶ谷の鼻の先にあたる地から鼻田と名付けられたともいわれます。

〈増森・中島・東小林〉

増森の「モリ」は、神社を指したといわれ「マシ」はめでたい字といわれますので、この地に神を祭ったときに増森と名付けられたとみられます。ここは、もともと古利根川が、増森から中島にかけて、大きく曲流していました。その対岸は吉川市の榎戸という地です。ところが大正十二年（一九二二）、増森から榎戸を分断して新川が掘られました。そのあとは古川になり、今ではこの古川も埋立てられ、榎戸と増森は地続きになっています。

ここも古利根川と元荒川に挟まれた地ですが、古利根川の方を本田、千間堀から元荒川にかけての地を新田と呼んでいます。それでこの千間堀から元荒川にかけての

大吉は、大芦とも書かれ、芦の茂った地から付けられた名のようなです。なお、新方地区の西方を流れる川は現在では新方川と称されていますが、もとは千間堀と呼ばれていました。堀の長さが千間あったことから名付けられたものではなく、長い堀を千という数で表現したようです。

増林地区

〈増林村と増林・花田〉

増林村は、明治二十二年（一八八九）、増森・中島・東小林・花田・増林の五カ村が合併してできた旧村で、現在は増林地区と呼ばれています。この新しい村名は合併した村のうち増林が一番大きな村で、しかも中心的な村であったことから増林村と名付けられました。この増林の地名は林が多い地から名付けられたとみられます。増林の増は「マシ」といい、めで

地は新しく開発された所であることがわかります。増森の小字には、外河原・内河原・荒川堤外など川にちなんだ名が多くみられます。また、三町野・鳥垣・立野などの小字もあります。このうち三町野は条里制の遺名ともみられていますが、三町歩ほどの耕地から名付けられたともいわれています。

中島の地名は、中島の「シマ」が耕地を指すので、川と川に挟まれた中の耕地とも解されます。ここは、その多くが砂地でほとんどが畑地です。このほか籠場という所があります。ここは古利根川と元荒川が合わさった所の河原です。その昔、徳川家康が増林の御殿から江戸に帰るとき、ここから駕籠に乗って川を渡ったというところで、籠場と名付けられたとも伝えられています。

東小林（現在の東越谷）は明治十二年（一八七九）の郡制のとき、頭に東の字が付けられたものです。それまでは小林村といいました。小林の地名は、林があった地から名付けられたようです。この